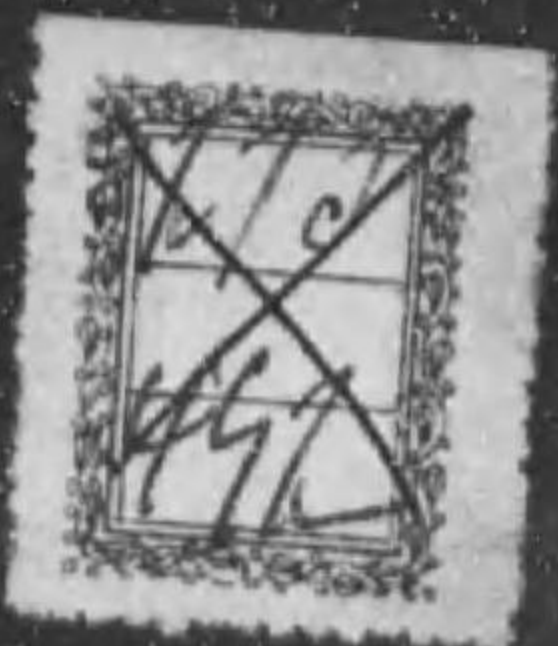


特116

703

項羽
檣舟慶
熊坂
小幡
聖守



始



白宗不家
觀十世
心之

43/116
703



項羽

概説

外四巻ノ一

秋草を刈り持ちて家路に歸る男、烏江の渡をわたりしに、渡守の男船賃を請ひけるより、始めより船賃を拂はざるべき約なりし事を語れば、船賃とて別儀にあらず、御身の携へる草花一本たまはりたまきなりと言ふ。いつれの花をりと召されよと勸むれば、美人草一本抜き取れるより不審と尋ぬれば、此花は項羽の台虞氏の墓より生い出でし草なる事を語り、更に項羽高祖の戦の様をも説き、遂に其身ハ項羽の幽霊なる由を明して姿を隠したるが、や、ありて項羽虞氏二人の霊現れ、戦の様などを語り、摸して失せまけり。

大正
10. 7. 25
内交

此曲前ハ開カニ後ハ手強ク謡フベシ

役別	装束	附	季	所
ワキ 草刈男	着附段髪斗目 水衣 扇 挿花持	白大口 紋附腰帶	九	唐土
ワキツレ 二人	着附無色髪斗目 挿花持 扇	縹水衣 白大口 紋附腰帶	月	江
前シテ 尉	面笑尉 尉髪 擗持ッ 扇	着附無地髪斗目 茶水衣 綴子腰帶	曲柄	替言順
ツレ 虞氏	面連面 側次 髪 髪帶 女髻	着附摺箔 唐織着流	目番五	四
後シテ 項羽	面三日月 唐冠 黒頭 黒鉢巻 半切 縫紋腰帶 修羅扇 鉾	着附厚板 法被	(目番二畧)	級

項羽

世阿彌元清作

草刈男 三人 次上ヨワン 拍子合
早月サナリ
 なかの暮して花に又なかの暮
 して花に又宿かゝるまをと尋ねん
早月サナリ
 くれの鳥江の野邊の草刈にてん
 今白もあまどり只今家路に
下中サナリ
 りの羽邊は錦の小萩原
中サナリ
 萱まどる鳥江の草刈

どの心もあく草蒔るまの心もあく。
 花と蒔るまや思ひまの家つとあれば
 いろいろのま花の敷とゆりもち
 甲元流し下 甲元流し下
 て席れば跡の秋暮れて枯野に
 すぐく虫の音も花と惜むか心あれ
 用ん心 用ん心
 花と惜むか心あれ 便船を待ち
 向ひへ越さうずるにて候

三十一 上 用カニ
 一セ 拍子合ハズ
 ツヨク

養老道滑かして僧寺に席り。
 紅葉聲乾いて牡鹿鳴くなる夕
 まぐれ心も澄める面白さ
 一セ 上 用カニ
 秋を野分を船の進風にて
 地用カニ
 萩の穂くる露の玉 ありなり
 その船に葉らうするにて候 あり
 三十一 用カニ
 豆され入るさそし船賃のわかれら

如まの者の船賃を来らせたる事
 のあくる船賃あくるはこのみに
 の適ひひま ワキサラシ さらさらの漱入廻
 らずすたての シテカッテ なるやう道理の
 中しつ船に居され入 ヨク 業ありおく
 れ志とある シテ 業あり シテ 業あり シテ 業あり
 業あり シテ 業あり シテ 業あり シテ 業あり

よする 上 露花 拍子合 ありてめて秋草の
 露花 拍子合 ありてめて秋草の 拍子合 業あり
 敷や カガ ざる月とや カガ 船に カガ 業あり
 天の アマ 何だ ナニ ありて ナニ 七夕の ナニ 業あり
 ありて ナニ 七夕の ナニ 業あり ナニ 業あり
 心せ ココロ 秋 アキ 吹 フク け ケ は ハ 波 ナミ の ノ 音 ネ 湊 ムナシ に
 近 チカ き キ 延 ノビ 虫 ムシ 小 コ 船 フネ 水 ミヅ 音 ネ あり アリ 船 フネ の ノ

中
水
船
棹
と
さ
ら
う
よ
や
水
船
棹
と

さ
ら
う
よ
。 船
が
ま
い
て
の
御
上
り
の
へ

御
船
恐
れ
て
の
船
賃
の
の

又
船
賃
と
作
せ
ら
れ
の
よ
の
為
に

こ
そ
向
ひ
に
て
し
定
め
て
候
に

何
そ
聊
爾
な
る
事
と
の
候
の
の
ぞ

の
船
賃
と
や
せ
は
ら
う
と
別
の
の
子
細

に
て
も
ゆ
づ
こ
そ
。 程
多
ま
の
花

を
あ
ご
も
と
賜
り
候
を
ぬ
ぞ

あ
ら
わ
さ
ら
づ
れ
に
て
も
な
ら
ぬ
入

か
ら
ば
こ
の
花
と
賜
ら
う
ず
る
に
て
の

不
思
議
や
あ
ら
れ
程
多
ま
の
花
の

申
に
行
ら
う
そ
の
花
と
の
撰
つ
て
る

さ
れ
の
ぞ
。 美
人
草
と

中して故あるをたにて佐ワキカシテあら面
 白かき入ビシシ茶サクおとみ付と中ししたる謂
 にてゆぞシテこれゆ項羽の后虞氏と
 中せし人のぎと投げ空しくあり
 珍ひと取トり上げ土中につまみめ
 作へづその塚ツカより生オひ出でたる
 草あれづとてシシカラさそく美人草ビシシは

中し佐ワキカシテ 中ワキカシテらば項羽高祖の戦の
 やきと。中ゴ存シ知チゆ何ナニとと御物語
 りゆシテ中ワキカシテらば終ハつて聞キせ中し佐
物語 中ワキカシテらば項羽高祖の戦。七十
 餘ヨ度ドに及キずといハども。始ハは項羽うち
 勝カち強チひ。一イチ度ドも高祖の利無ナかり
 一イチに或時項羽の兵心ツバモノ衰ガりし却カつて

項羽とせりめつ。四面に圍の聲を
 よぐれ。虞氏の思ひに堪へかねて。
 いかにせんといひ。鈴も又望雲驢
 とらぬ馬の一日に千里を駈ける名
 馬あれども。その運命盡きぬれ
 ば。膝を折つて。足も行かず。その
 時項羽のちりも。強かず。馬より

走りしつと。下り立つて。いかた名馬
 童。種が首とつて。さる祖に拵げ名
 揚げよ。やと。呼ばれども。名馬
 童の。怒れて。逃づかず。不覚ある
 者の心かな。なれ。見よ。後の世に。語り
 傳へよ。といひ。あへず。剣を抜いて。あへ
 なくも。われと。我が首を。捨き。落し

呂馬童リウマドウに興キョウへその儘タラシの原ハラの
 露ツキと消シユえにけり。望ノゾミを空カラに馳ハシり膝ヒザ
 を折マゲり。黄ワウある海ウミを流ナガせばさあ
 み倍ツヨクれば神カミが心ココロ昔ムカシに返カエる身ミの
 果ハテ今イマは色イロまどわれこそ項羽キョウウ
 が幽ユイ霊レイあらはれたり跡アト吊ツルひて
 たび終ハシへ跡アト吊ツルひてたび終ハシへ
 中入間

待マツ議ギ
 上ウヘ羽ウ上ウヘ羽ウ上ウヘ羽ウ

根ネがに吊ツルひ法ホウの聲コエ立てて吊ツルひ
 法ホウの聲コエ立てて波ナミにうきぬの夜ヨ
 とあく。晝ヒルもわかれぬ吊ツルひの船フネ
 若ニヤの船フネのおのづからその纜ワタと
 法ホウの心ココロと静シズカめ聲コエとあげ
 一切イチケツ有情ユウジヤウ殺害シヤウガイ三界サンガイ不墜フタイ去惡ソコク起キ
 昔ムカシは月ツキ卿ケイ雲ウン空カラうちかてみ今イマは
 後ノチ三項羽サンキョウウ上ウヘ手テ確カタかり
 出端イデ

樵歌野田の月ノ爛體霧ノ深ノ古
 松下の歌ノ昔ノ紛ノ々ノとノてノ舊ノ銘ノ
 と埋ノむノらノ雲ノ向ノ横ノぎノるノいノでノた
 ちノはノ天ノつノあノ女ノのノ調ノへノかノなノまノ上ノ
 各々ノ妓ノ樂ノとノ奏ノしノつノ各々ノ妓ノ樂ノとノ
 奏ノしノつノ夢ノのノ黃ノ楊ノ柳ノ彈ノくノ琴ノ
 琴ノのノ面ノにノ因ノのノ聲ノとノよノらノれノば

又執心ノの責めノあるノぞノやノあノらノ苦ノ
 一の苦患ノやノあノ虞ノ氏ノはノ思ノひノよノ
 堪ノかノねノてノ虞ノ氏ノのノ思ノひノにノ堪ノへノかノねノ給ノ
 ひノてノ高ノ樓ノにノ昇ノりノてノ高ノつノるノあノらノ
 からノ海ノのノ雨ノのノ影ノとノ投ノげノ空ノへノくノ
 ありノ終ノへノだノしノ項ノ羽ノのノ虞ノ氏ノがノ別ノれノとノ
 我ノがノ身ノのノあノりノゆノくノ草ノ葉ノのノ露ノ諸ノ

共に清えはてし悲しき思ひ出づ
 れば劔も鋒も皆投げ捨て身
 とたくはかりに口惜しかりし夢
 物語そ哀あるシテ中ハ手強ク胸カニあはれ苦しま
 眞素の焰日ニササリト手強クあはれ苦しま眞素
 の焰のまぢりあがりつゝ建方と見
 れば高祖に屬して雲せくる波

○仕舞

の。まきまの聲が聞けども版立ちらひて
 物見せんとみづからあけ出で敵と
 近づけ取つては投げ捨て又は
 引き寄せ捨ち首とりとりに恐
 ろしかりける勢あれども運盡
 きぬれば鳥江の野邊の去中の
 塵とぞなかりにける。

橋辨慶

概説

外四卷ニ

武藏坊辨慶宿願の事ありて、毎夜五條の天神に丑の時詣をなすけるが或
夜従者は京に隠れなき五條の橋の人斬りの事を語りて思ひ止りたま
へと言ふ、さはあれ辨慶程の者が物怖ぢりてと言はれんは無念な
りと、風すさまじく更なる夜の五條の橋にさかれば、小冠者の振
舞めざましく、さしもの辨慶も大長刀を振ふに詮なくして降参し、
名乗たまへと言へば、義朝の子牛若と言ふに、主従の約を結びけり。

此曲前後共サラリト強メニ謡フベシ

後シテ 弁 慶	子 方 牛 若	ト モ 弁 慶 太 刀 持	前シテ 弁 慶	役 別
半切 紋附腰帶	袈裟包 着附厚板 小刀	着附厚板 素袍上下 小刀	金入角帽子 着附厚板 小刀 扇 荊高球敷	装束
長刀	法被 黒水衣	太刀持	水衣 白大口 腰帶	束附
目番二番	目番四	曲柄	月九	季
級	五	警古頃	前 後	所

シテ辨慶詞 手強ク確カリ

橋弁慶

佐阿彌安清作

引れハ西塔の傍に住む武元坊辨
 慶にてい。われ宿願のふ細あつて。
 五条の天神へ世の時詣と作り
 依。今日満参にてい。移は。只今集
 らざやとあし。依。いかん報がある
 御前トモカササリにシテ手強ク五條の天神テシへ参らう

橋弁慶

ずるにてあるぞそのが心得ゆへ
 畏つてゆへ又やすまき事のゆへ
 五條の橋と通つり伏所に十二三は
 かりある幼まき老ぶる刀にて斬つて
 由り伏へざあから蝶鳥の如くある
 由りしいまづまづ大う夜の御物指の
 思へるし御止りあれかりとぬじゆ

シテ

言信道断の事とやす者かお能
 へ天魔鬼邪ありとも大塊かに適ふ
 まどおつらうゆめて討たざらん
 おつらうともむれば不思議にはづれ
 敵と手許に寄せつけす
 く害れべ目にも見えす
 神衰奇持不思議なる神衰奇持不

思議なる。生に物に寄せ念せが
 こう御身討たすらん。都廣しと
 かせども。され程の者あらじげに
 奇珍なるものかな。さあらば今夜
 は思ひ止らうずらうてあるそいや
 辨慶ほもの者の。聞き遁げの量
 念あり。今う夜夜更けに橋に行き。に

○小話

生サリの物モノと平ヒラげんとト夕ユフ程ハジメあハく暮クれ方カタの雲クモ
 れ方カタの夕ユフ程ハジメあハく暮クれ方カタの雲クモ
 の氣キ色イロも引ヒきかハて。風カゼ津ツく
 文フくる夜ヨと遅オソしとこその待マち居イた
 れ遅オソしとこその待マち居イた。中ナカ入イ早ハヤ敷シ間マ
 子コ方カタ牛ウシ若ワカ上ウヘ
 行イけあハい寺テへ登ノるべシ今イマ宵ヨぞカりノ

名跡ナトあられゴべ。五條の橋ゴジョウノハシに立ち出でる。
 川波カハナミ係ケイ入イて立ち待まちちらに月ツキの光ヒカリを
 待まちつべしと。外ソト波ハミのウツク氣キ色シロカなそれか
 夜ヨ虎コのウツク夕ユフ紅ベニのウツク秋アキのウツク風カゼ
カサ面オモ白シロのウツク氣キ色シロカやあ。面オモ白シロのウツク氣キ色シロカ
 やあ。そらソラ浮ウきままららわが心ココロ。彼カも
 玉タマ散ちるち白シロ露ツキのウツク夕ユフ顔ガハのウツク花ハナのウツク色イロ。

上三折ウサミ白シロササリ朗朗カニ
 拍ウチ子コ合カ
 小コ鼓鼓

カサ切

五條の橋ゴジョウノハシの橋板ハシイタをトとろとろと踏フミみ
 鳴ナるる音ネも輝ヒかにニ交マるる夜ヨにニ通トるる人ヒトを
 ぞ待まちち居ゐたるる通トるる人ヒトをトぞ待まちち居ゐたるる。

後シテ行イ手強ク
 一ヒト声コエ

鐘カネももままぎぎままのの雲クモのの光ヒカリり輝ヒく月ツキ
 の夜ヨにニ著ツキたるる鐘カネのの黒クロ革カののおどし
 に威オドせるる大オホ鐘カネ茶チ摺ズ長ナガにニ著ツキあ

つゝもとよりの好む大薙刀。真中
 取つて打ちかづき心持ゆらりゆらり
 と出でたる有様拍子合いかなる天魔鬼
 神ありとも面を向くべきやうあ
 らどと我が身元ながらもト抑頼も
 一うて手にたつ敵の密サレさま
 川子方上風もさや更けらるる橋の面オモに

通る人もあきぞとて心もさげに
 やすら入べミテ辨慶かくも白飯の
 立ちより後る橋板をさも荒ら
 かに踏み鳴せば子方上牛若彼と見る
 よりもすすまやうれや人尋る
 ぞと。薄衣あほも引ま被カツき。傍カハラお
 寄りソ係ズひズ佇めばミテ辨慶彼れと

心持シ
心つけつゝ。立廻リ詠とかけんと思入るも。

見れば女の姿あり。われは出家の

事あれど思ひ煩ひさきまて行く

子方サラリ
牛若彼とあふつてゑんと行ま違

ひさまに薙刀の柄えとはつと

薙よぐれば。すはしれ者よもの

えせん。と。薙刀やがて取り直し

○獨吟

段々トサト進ム心

薙刀やがて取り直し。りぞものえ

せん。手あみの強と斬つてかかれむ

牛若の。かゝも。強がす。突つ立ち直

つて。薄衣引き除けつ。しづつ

と。太刀ぬき。敵つて。つ。支へたる薙

刀の。切先に。太刀打ち合せ。つ。め。つ

開り。戦ひ。か。行。と。か。た。り。け。ん。

手許に牛若寄るぞぞ忍え
 かつみ重ねて打つる刀にぞも
 の辨慶合せ垂ねて。橋桁を二
 三向志すつて。所とぞ清したけける。
 上元辰シ
 あらおろしあれ程の。あら物々
 あれ程の。小性づ人を斬れ。きて手
 むみにいかで。傳すべまの。薙刀柄長

くおつさりの。へて。きり。か。つて。ちや
 うと。切れ。む。け。て。右。に。む。び。ち。か
 む。取。り。直。し。て。て。裾。と。薙。ぎ。拂。
 へ。躍。り。上。つ。て。足。も。た。め。ず。宙。を
 拂。へ。ど。頭。を。地。に。つ。け。千。々。に。執。み。大
 薙。刀。お。ち。り。落。さ。れ。て。力。あ。く。組。ま
 ん。と。寄。れ。べ。切。り。拂。み。す。が。ら。ん。と

するも候ありせん方なくて無慶
 稀代あるか人かなとて果
 果てそぞ立つたりける不思議
 や御牙根あれどもまだ推ま安
 にてかほどけあげにまますぞ
 委しく名告りおはしませ
 今は何とぞか色むべきわれの源牛若
 子方上サリ

地ニツタ
 義朝の御子カシコて母上西塔の武藏
 無慶あり互ひに名告り合ひ互ひに
 名告り合ひ降参申さんお免あれか
 人の御事われの出家位も印もけ
 あげさもよきの主あれ頼むあり粗
 忽にや思しめすらんさりあからこれ
 又二世の機縁の始め入りより後何主
 地ウケテ

後ぞと契約せむくすしつる夜
彼かせなり兵慶も薙刀打ちかつ
て九條の御所へぞまうける

熊坂

概説

外四卷ノ三

都の僧赤坂の宿にて僧とも覺しき人に會ひ、導かれて其人の庵室といふに到れば、兵具轟とばかりに立てあるより仔細を問へば、此邊は山賊夜盜巢を張れる物騒の所なれば、往來の人々禍を受くる事稀ならず、さやうの時は飛出でん爲の用具なり、似合はぬ僧の腕立をかと思ひ給ふべしなど語り、夜更けたればとて共に眠ると見しが、夢さむれば、其人も庵室も消え、松陰に夜を明せしなり、かくて有明頃に至り、熊坂長範の靈現れ、吉次の宿を襲ひ牛若と渡り合ひたる時の事どもを語り或は摸して失せけり、

此曲終シテ強ミニ大キク謡ヲ宜シトス
小書 替ノ形

役別	装束	附	季
ワキ僧	角帽子 着附無地敷斗目 水衣 腰帶 扇 珠數		九
前シテ僧	角帽子 着附無地敷斗目 黒又細鞋水衣		月
後シテ熊坂長範	面熊坂 長範頭巾 着附無色厚板 法被 半切 縫紋腰帶 長刀		曲柄 替古順
			目番五 級
			目番二 級
			所
			美濃國不破郡赤坂

熊坂

禪竹氏信作

早僧次才上
拍子三合
ヨワク

憂しとけふ言ひて捨つる身の憂し
 とけふ言ひて捨つる身の行方いつと
 定むらん 早内サナリ
 僧にてもわれまた東國と云ふは
 只今思ひ立ち来玉修行と志す
 ヤ山越えて近江路あれや湖の近江
 道行上

踏フミまれや湖ウミの粟津アハツの森ノも見ミえ
 渡ワタるカ田タの長橋ナガハシうち過スぎて野路ノチ
 篠シノ原ハラに夜ヨをとめて朝アサ立つ道ミチの露ツル
 深フカきノ名ナこそ青野アヲノが原ハラあからシ色イロ
 つくツくクろロが赤坂アカサカの里ノも言イハれ行く日ヒ
 影カゲかな里ノも言イハれ行く日ヒ影カゲかな
 なナうウあアうウあアれレある御僧ミソウに申マウすスまマ

シテ僧門シテソウモン千強ク

呼掛

事コトのノゆユ此方コノカタの事コトにて依ヨか何ニ
 事コトにてゆぞシテけケはハゆユのノさサるル者モノの命イ日ニチ
 いてイるル巾ツバひヒてテ珍メけケけケりリゆユ入イれレてテ
 出家シュツカの望ノゾミあれレさサりリながらニ初ハジメと志シ
 してシ世セ向ムカすス入イるルたタらラひヒその
 名ナの申マウさサびビともトあれレはハんンえエたるル末ヒトキ
 の松マツのノ少オホしシげゲ方カタの芽カヤ原ハラこそト今イマ

尾及

二

中コす古墳フシあれ。性連アヒ復フあらねを申す
 ありワキカッテあら行イもなや。誰ミテウケテと名を
 いらそ。由ユ向ムカぬいかならん
 こそも苦クからず。法界ホフカイの衆生シユ平ビヤウ
 等トウ利益リキ盡ツク出離シュツリ生死シニと。離ミテれよ
 野ノ上ノ御用ミヨウひと身ミに受ウケけの御用ミヨウひ
 と身ミに受ウケけは。たタらラひヒその名ナの各ナ

○小菰

告ツらラずスも受ウケけ喜ヨロコぶブそれレてそ
 主スよ有ユ難ナンや。回クワ向ムカの草クサ本ホ國クニ去サまで。
 もらさスあハれハわハまハすスそノまハに
 と心ココロあハてあハくクもモさサてテそノ回クワ向ムカ
 あハれハ深フカまハでハいハかハあハるルべハまハ。
 此コ方カタへ御ミコト入イりハ愚グ僧ソウがガ庵アツ室シツのノゆ
 に一イチ夜ヤをヲ明アカしてハ街マチ通トホりハ入イりハ

加うるをらうするに^{シテ}いかに^{シテ}申し
 持^テ佛^堂に^{シテ}まり勤^トと始^メらうする
 と^シぬしゆ郎に安^ク置^キし^テ給^ヒま^シべき繪
 像^ノ木^像の形^も亦^く。壁^にの大^薙
 刀^{。柱}杖^にあらざる鉄^の柄^{。其}の外^ハ
 兵^具と^ひつ^して^立て^置かれ^ゆ。
 行^と申したる御^事にていぞ

^{シテ}いかに^{シテ}申し
 いていかに^{シテ}申し
 垂^ル井^{。青}墓^{。赤}坂^とて^{。其}の^里は
 多^けれども^{。同}々の^道より^{。青}聖
 が^原の^草高^く。青^墓子^安の^森
 繁^れば^{。吾}も^いを^す雨^のうち^に
 は^{。山}賊^夜盗^の盗^人等^{。高}荷^をと

落し里通ひの下女やうしたの者
 までもうち剥ぎ取られ泣き叫
 ぶさやうの時この僧も例の薙
 刀ひつさげつゝささは愚僧に任
 せよと叫ばわりかくればはげは
 又一度のさもあまき時もあるさやう
 の時はこの前の便にもなるものぞ

かつと閑ん心抱ひあへる怒るゝと思ひはか
 りの心なりあんほりあさましき
 世と捨て去るのお存作ぞ志せう
 前の手柄似合はぬ僧の腕立てさ
 こそとわかと思むらんびりあから佛
 も殊院の利剣や愛深の方便の弓に
 矢を射げ多門の鋒と横たへて鬼

魔と降伏し災難を拂ひ終へり
 シテ上
 此れは愛著慈悲心の明達多かり
 に勝れ方便の救生の善菩薩の六度
 に優れりとかたれと見かれと聞き
 他とは是非知らぬ身のゆくへ迷ふも
 悟るも心ぞわされむ心の所とは
 あり心と所とせざれと古き詞に

知られたる中元夜
 も明けあまのお休みあれや御僧
 たちわれもまごろまんさらばと
 眠藏にアノ入るよとんえつるカ形も
 失せそ庵室もあむひららとなりて
 松陰に夜と明たる不思議さま
 夜と明たる不思議さま
 中入間

熊坂

六

羊上三
持端

熊坂

一夜外す。牡鹿の角の東の向も。
牡鹿の角の東の向も。寝られん。
ものか秋風の松の下。夜もすがら。
聲佛事とやあしぬらん。聲佛
事とやあしぬらん。

後ニ熊坂上
出端
拍子合ハク

東南に風立つて西北に雲静か
らず。夕闇の夜風烈し。山陰に

地
サリ
ス

栲木の向や踏ぐらん。有羽漬か

つりか。月の出ても朧夜あ

つ切り入れ。攻めよと前段を下

知し。弓手や馬手に心を配つて人

の寶と奪ひ。悪逆婆娑の執心

これに後んせよ。済まや。熊坂の長

範にてましますか。その時の有様

熊坂

七

御物格の御入 シテ上 手強クシツカリ こそても三條の吉次
 信高とて黄金と高ふ高人あつて
 毎年数多の寶と集めて高
 荷と作つて奥入下るあつたれ
 ととらむ中興力の人数の強々そ
 こそ國々より集まりし中に取り
 てもたがかりしぞ シテ中 手強ク用ガニ 河内の覺紹

磨針を即兄弟の表討は並ひあ
 こそ又都のそのうちには多き中に
 も強がかりしぞ シテ内 手強ク 三条の衛門
 壬生のお猿 シテ内 抑ヘテ 火もりの上手
 分け切りには シテ内 抑ヘテ くれらたよも
 越さ シテ内 手強ク こそ北國には越前の
 麻生の松若三國の丸郎 シテ内 手強ク 加賀の

玉にの態坂のシテ内大キクハ確カリ 此の長公苑を婚と
 して究竟の手柄のしれ者等。
 七十人の興力して早カレ上サラリ 言次が通る道
 すがら野にも山にも宿泊は目
 附をつけてそれと公すシテ内手強ク 此の
 赤坂の宿に美しく。そこそそ究竟の
 所あれ退き場も四方に道多し。

〇四定舞子

先ヲカハ 元れど宵より遊君す急。数百の遊
 び時を移す早カレ上サラリ 夜も交け行けば
 言次兄弟前にも知らず跡たり
シテ中抑テ 一に十六七の小男の目のうち人
 に勝れたるの障子の隙間物間の
 そよよもするをひよあけて
早カレ上サラリ 少しも跡さぞありけるをシテ内大キクハ確カリ 牛若

殿の夢にも知らず 軍の盡き

ぬる盗人等 機嫌のよきぞ

入れと 交こそ強もえりけれ

云ふこそ強もえりけれ 皆われさ

きたと松竹と 投げまみ投げこみ乱

れ入る勢の妖疫神も 面と向くへ

まやうぞあまき 然れども牛若子少

一怒るゝ動色あくぶちかをと抜いて

渡り合ひ獅子奮迅虎乱入死鳥

の翔りのまをくらたま攻め戦へは

こらへる面に進む十三人同枕に

切り伏せられその外手負方刀を

捨て具足をと奪れ這ふ這ふ遁げ

て命ばかりと免るもあり 熊坂

〇仕舞
 交ふ中うこの者どもとよみの下に討つ
 はいかさま鬼神か人同にてぬすも
 あらうと。盗血も命のありてこそあ
 ら志よりや引かんとて長刀杖につ
 きうろめたくも引まける
 然坂思ふや。然坂思ふや。怒りものも
 の。その冠者が斬るといふも

さぞあるらん。然坂秘術と奮ふ
 らべいかなる天魔鬼神なりとも。宙
 につかんで。微塵にあ。討たれたる
 者ども。のいで。供養に報せんとして。
 通より取つて返し。例の長刀引ま
 する。折妻戸とこだてに取つて。
 彼の小男とねらひけり。牛若子は

山^ゴ崎^クりて。る^ル刀^タ拔^ヒき。そ^ソは^ハめ^メ如^ニあ^ハひと。
 少^コし^シ隔^ヘて。待^マち^チお^ホみ。怒^イ坂^サも^モ羅^ラ刀^ト。
 か^カま^マ互^ニに^ニか^カら^ラを^ヲ待^マち^チけ^ケる^ル。か^カい^イら^ラ。
 つ^ツて^テ怒^イ坂^サ左^サ足^{ソク}と^ト踏^フみ^ミ鐵^{テツ}壁^{ヘキ}も^モ徹^{トウ}。
 れ^レ突^ツく^ク羅^ラ刀^トと^トぞ^ゾつ^ツ志^シと^ト打^ウつ^ツて。
 弓^ユ手^テへ^ヘ越^コせ^セば^バ追^オつ^ツ急^キけ^ケす^スか^カさ^サず^ズ込^コ。
 む^ム羅^ラ刀^トに^ニお^オひ^ヒら^ラり^リと^ト棄^スれ^レば^バ毋^ム向^{ムカ}に^ニ。

あ^ア。志^シこ^コつ^ツて^テひ^ヒけ^ケば^バ馬^{ウマ}手^テへ^ヘ越^コす^スと。
 お^オつ^ツり^リ直^チつ^ツて^テあ^アら^ラう^ウと^ト切^キれ^レた^タ中^{ナカ}。
 に^ニて^テ結^{ムス}ぶ^ブと^トほ^ホく^クま^マに^ニか^カつ^ツて^テ拂^{ハラ}。
 へ^ヘお^オひ^ヒ上^ウつ^ツて^テそ^ソの^ノま^マん^ンえ^エず^ズ形^{カタ}。
 も^モ失^シせ^セて^テ此^{ココ}處^{トコロ}や^ヤ彼^カ處^{トコロ}と^ト尋^ヒぬ^ヌる^ル。
 所^{トコロ}に^ニ思^{オモ}ひ^ヒも^モよ^ヨら^ラぬ^ヌ後^{ノチ}より^リ。具^グ足^{ソク}の^ノ。
 ま^マき^キま^マと^トあ^アら^ラう^ウと^ト斬^キれ^レた^タわ^ワい^イか^カに^ニ。

あ。の。冠。者。に。斬。ら。る。事。の。腹。立。ち。
 さ。ま。も。も。天。命。の。運。の。極。ぞ。
 進。心。を。有。る。打。物。わ。ぶ。た。て。て。適。み。ま。ま。
 打。物。わ。ぶ。た。て。て。適。み。ま。ま。手。取。り。
 に。せ。ん。と。て。薙。刀。投。げ。捨。て。太。鼓。を。ひ。
 ろ。げ。て。そ。の。面。廊。か。こ。の。つ。ま。り。
 に。逃。つ。か。け。逃。つ。め。取。ら。ん。と。す。ね。も。

陽。炎。縮。妻。氷。の。月。か。や。姿。の。ん。ね。も。
 手。に。取。ら。れ。ず。次。第。次。第。に。重。手。
 の。負。ひ。ぬ。次。第。次。第。に。重。手。の。負。ひ。ぬ。
 猛。ま。い。心。力。も。弱。り。弱。り。行。き。て。
 この。松。の。根。の。露。苔。の。露。霜。と。消。え。し。
 昔。の。物。語。末。の。世。助。け。た。び。珍。人。と。
 夕。つ。け。も。告。げ。渡。る。夜。も。白。々。と。赤。

坂の松陰に隠れけり
松陰にてその
かたれけり。

熊城

廿二

小督 概説

外四巻、四

高倉院の後宮に御寵愛淺からざりし小督の局は、時の中宮が清盛の女なりしかば世を憚りてか、或夜姿を隠せしに、帝いたく歎かせ給ひ、彈正大弼仲國をして尋ねぬ。仲國寮の馬に乗り、明月に鞭をあげて嵯峨野に到れば、法輪寺の邊にて琴の音聞え來にけり。曲は想夫憐、主は局と知れたれば、片折戸を排して内に入り、叡慮の程を傳へて、帝よりの御書を授けしに、局は其身の上を果敢なみつゝも感涙して御返事を認め、仲國に渡し、仲國は尋ね當てたるを喜びて舞を舞ひ、名残惜みて都に歸りけり。

此曲終シテ色艶ヲ付ケズ品ヨク謀フベシ
小書 恋ノ舞

後シテ源仲國	トモ侍女	ツレ小督局	前シテ源仲國	ワキ勅使	役別
前シテ同ジ	葛扇 面連面 髮 髮帶 着附摺箔 赤塔唐織着流	葛扇 面連面 髮 髮帶 着附摺箔 赤地唐織着流	白大口(淺黄大口ニモ) 縫紋腰帶 男扇 着附厚板 地敷軍狩衣	洞烏帽子 着附厚板 恰狩衣 白大口 紋附腰帶	装束附
目番二器	目番四	曲柄	月	八	季
級	四	藝名順	嵯峨下郡野葛國城山		所

小碁

禪竹氏信作

早勅使ササリ

これの高倉の院には奉るは下あり。

先ヲカハ

さそも小督の局ツボチして君の由寵キヨウ

愛のほろの中宮ミヤウ又正マサ相國シヤウの

御息女ミヨメあれど世の倅ハヒカリを思オモめ

けるわ小碁の局ツボチ暮クレに失シせ終ハひてゆ。

君の御歎ミナ限リミあり。晝ヒルは夜ヨルの大殿ダイテンに

入り給ひ。夜の又南殿の床に明させ
 給ひ。所には小幡の局の御行方。暖
 野の方には岩の由聞しめし及られ。
 急ぎ彈正の大弼仲國と召して。小幡
 の局の御行方と書ねて。まれとの
 宣旨に任せ。只今仲國が私宅へと
 急ぎ候。いかには仲國のわたりのか

シテ仲國

報にてわたりのぞ ワキササリ 此の宣旨にて

いさても小幡の局の御行方。暖

野の方には岩の由聞し及らせ

給ひ。急ぎ書ね出て。此は書と興へよ

との宣旨にてい シテ仲國 宣旨長つて承

り候。さそ暖候にていかやうなる前

ろか申し候 ワキササリ 暖候にてわたりの持物

したる所こそ聞しるされてゆへ
シテ 申すの賤が屋にの片物戸とやす
先ツカへ ものついで今夜の八月十五夜にての間
 琴弾きおとぬ事あらど。お督目の
 局の御調をばよく聞き知りて簡。
 御心安く思しめせと拍子委しく申し
 上げれば、ワキ けの由奏聞申しければ。

御感の餘り奈くも察のほ馬と給か
 るあり、シテ 時の面目長つて、拍子 わがて
 出づるや秋の夜のキわがていづるや
 秋の夜の月毛の駒よ心して雲
 居に翔れ時の向も急ぐ心の行方
 かお急ぐ心の行方中入な
 げにや樹の陰に宿り、河の流を

ツレ侍女天

汲む事も皆これ他生の縁ぞかた
あからさまなる事あがら別れて
預ける軒の葉も悲ふたより又
女の目にふれあふ世のあらひあかぬ
はくのころかあ カテいざいざさらば琴の
音に立てても シ思ひ ウせめて
や暫し慰むし カせめてや暫し慰

○小謡
調一音

後シテ仲國上
一 聲
○ 吟
○ 独吟
拍子合ハ六

むと ウかき ウあす ウ琴 ウの ウおの ウづ ウから ウ秋 ウ風
に ウた ウら ウへ ウむ ウ啼 ウく ウ虫 ウの ウ聲 ウも ウお ウみ ウの ウ秋
や ウ恨 ウむ ウる ウ哀 ウや ウ憂 ウき ウ何 ウを ウか ウく ウね ウる
女 ウ郎 ウ花 ウわ ウれ ウも ウ憂 ウき ウ世 ウの ウ暖 ウけ ウの ウや ウぞ
人 ウに ウ語 ウる ウあ ウの ウ有 ウ様 ウも ウ恥 ウか ウし ウわ
あ ウら ウ面 ウ白 ウの ウ折 ウか ウら ウ中 ウあ ウ三 ウ五 ウ夜 ウ中
の ウ新 ウ月 ウの ウ色 ウ二 ウ千 ウ里 ウの ウ外 ウも ウ遠 ウか

○仕舞
 シテ上
 賄カ家右の假あれどもしやと思ひ
 鞭とあけて弱と早め急かん
 渡る片朽戸と知るべにて
 形の方の秋の空をさこそ心も澄み
 鹿あくこの山室と詠めける
 勇む弱の足並夜の歩ぞ心せよ壯
 らぬ敵慮畏き執とらけて心も

心持シ
 ちかしこに弱と驅け寄せ驅けよ
 せて控へ控へ聞けども琴弾く
 人のあかりけり月にはあかくかれ
 出で流みと法輪にまれば琴こそ
 聞え糸にけれ嶺の岩か松風か
 それりあらぬかあぬる人の琴の
 音か樂は行ぞと聞きたれば夫と

想ひてハヒテ。意イふるル。名の想オモヒ夫ト徳トクあるコトぞ。
嬉ウレシしコト。疑ウタガヒもナシ。小督コトクの局マユの
御調ミツリにてシラメ。わがシラカハてカ。葉内エハチとヤ。さウ。
するシにてシ。わらシかハ。この戸カドあキけセ。
珍メヅル人ヒト音ネのス。するシ。はハ心
得トクてシ。聞きキ。ふフへヘ。なナかカあア。かカにニさサ。かく
悪アクらラ。悪アクらラ。かりカリあア。んン。まマ。うウ。この

樞クワとト押オシ。ひヒらラくク。門カド閉ヒ。されレてハ。
適タテマまマ。とト。樞クワとト押オシ。これレのシ。宣ノシ。意イのシ。
御使ミツリ仲ナカ。國クニ。これレ。まマ。でデ。まマ。りリ。たタ。りリ。そソ。のノ。
由ユ。申マウ。しシ。給タマフ。みミ。べベ。トト。現アツク。あア。やヤ。かカ。らラ。るル。
卑ヒ。しシ。きキ。賤セツ。かカ。家ヤ。にニ。行イ。のノ。宣ノシ。旨シ。のノ。ゆユ。べベ。きキ。
門カド。違ヒ。ひヒ。てテ。まマ。すス。かカ。らラ。わワ。らラ。なナ。
色イロ。まマ。せセ。給タマフ。みミ。さサ。もモ。人ヒト。目メ。づヅ。みミ。もモ。傳ツク。れレ。

出づる袖の後の玉環の調の隠れ
 あきものをとげに恥かしくや仲國
 の殿上の清遊のせりせりは
 笛はれと召し出されて舞れ
 雲居の月も寝らす人も訪ひ来
 てあひにあふその糸竹の夜の聲
 密に傳へ申せその勅後とば何と

さな隔て終む中垣の葉か下に
 よしとらば今宵の行敷の袖あれて
 月に明さん前と知るも暖焔の
 山前と知るも暖焔の山清幸絶え
 行跡はかからみ代の古道たどり
 来し行方も君の惠ぞし深き情
 の色香をも知る人のみぞ花鳥の

申権

音にだふたてふあづま屋の主人は
いぶ知らず。調の隠れもあらう。

トモヨサリ

仲國御目にからざるん程は帰る

まぐまごてあの榮垣のももに

露にせられて御入り作。勅後と

申し痛をさくらひ何ぞか悪むせ

候ふま。此方へかへれ候らせゆん

ツリ

げにげふわれもさやうに反思入

とも。御の事の心乱れにまの墨

ま。前も知らぬとも。さらば此方へ

申し候へ。トモヨサリへ御入りへ

長つての勅護に任せられまてし兼

りていさてもかやうにあらせ給ひ

て後。玉體衰へ寂慮あやま

トモヨ

くらえさせ給ひていせめての御
 事に御行方と尋ねてまれとの
 宣旨と蒙り辱くも法書と賜つ
 てこれまで持ちて参りてい。恐
 なから直の御返事を賜つて
 奏し申しゆん。もさうりも
 辱かりし御惠及びあまの身の行

○サレ由独吟
 ○切走雜子

かまでも頼む心の氷蓋の跡さ
 深き御情。愛らぬ教は雲居よ
 り。あほ疎る身の露の世と憚の
 心にも。そみてそ。涙ありけれ
 や訪れてぞ。かに白玉のあつから
 あから入て。憂き年月も。嫉
 りける。住居かな。月夜を。知るも

数あるらぬがには及ぶぬ事なれども
 妹背の道は隔るまは彼の漢王の
 その昔耳泉殿の夜の思ひ堪ぬ心
 や胸の火の煙に残る面影も
 心の中程あまのあはれの色なかり
 かなりし契つなひ唐帝のいに
 へも彌山宮の松詔漏れし始と書

ぬるにあだある露の清芽は袖
 朽ちた秋の霜忘れぬ夢を訪ふ
 嵐の風の傳まで力に志ある心か
 りけり人の國まで訪ひの衰
 を知れば常あらずあまの世と思ひの
 数々にわたりあまの恋心やと碎
 きてもいやまの戀慕の乱れある

有明の月トの都トの外トまでもト教慮ト
 にかゝる御惠トいとも畏トまき勅トおれト
 だト宿トをトとト問トはトれトてト女トとトいトかト
 参ト入トんトたトれトまトでト女トやトさトらトなト
 てト直トのトおト返ト事ト賜トりト御ト服ト申トしト
 きトらト出トづトるト月トにト問トふト宿トりトのト假トの

霧トのト世トにトさトれトやト限トのト御ト使トおトもト
 ひトでトのト名ト跡トぞトもト慕トひトてト落トつトるト涙ト
 かなト風トもトよトしトやト星トあトひトのト今トうトのト
 稀トあるト中トありトとト遠トにト逢トふト際トハト
 程トあトらトしト迎トへトのト舟ト車トのト傾トてトこトそト
 希トらトめトとトりトどト名ト跡トのト心トとトてト
 酒ト宴トをトあトりトてト糸ト竹トのト聲ト身ト澄トみト

渡る。月夜かな。月夜よ。破掛男舞

地上 吹ま合すめる。笛の音と

ひま留む。ま言の。葉も。ま言

○仕舞

の。葉も。あ言の。葉も。あ言の

葉も。あまき君の。清心。われら。身ま

でも。物思ひ。は。ま。ち。舞。ま。づ。も。あ。ら

ぬ。心。今。の。舞。り。て。嬉。し。さ。を。何。に

包。ま。ん。唐。衣。の。た。か。に。袖。打。ち。合。せ

御。眼。申。し。多。く。心。も。勇。め。る。勢。に

ゆ。ら。り。と。う。ち。葉。り。清。る。姿。の。あ。と

遠。く。お。智。智。の。見。送。り。仲。國。の。都

へ。と。そ。こ。そ。悔。り。け。れ。

羽黒山の山伏春日野にて一人の老翁に會ひ野中に水あるを何ぞと
 問へば我等如きの野守の影を映す水なるによりて野守の鏡ともいひ
 又は昔此野に御狩のありける時御鷹の行方此水に映りて知れりかは
 此名ありともいふなど語りされど眞の野守の鏡とは鬼神の持てる物
 にこそ見たりと思さば侍ちたまへとて消え失せしが後鬼神となり
 て現れ非想非々想天までをも映す鏡を見せて大地にかつばと隠れけり

野 守

概説

外四巻、五

羽黒山の山伏春日野にて一人の老翁に會ひ野中に水あるを何ぞと
 問へば我等如きの野守の影を映す水なるによりて野守の鏡ともいひ
 又は昔此野に御狩のありける時御鷹の行方此水に映りて知れりかは
 此名ありともいふなど語りされど眞の野守の鏡とは鬼神の持てる物
 にこそ見たりと思さば侍ちたまへとて消え失せしが後鬼神となり
 て現れ非想非々想天までをも映す鏡を見せて大地にかつばと隠れけり

此曲終シテ強クサラリト後シテハ確カリト謡フベシ
 小書 白頭 黒頭 天地ノ聲

後シテ鬼 神	前シテ野 守尉	ワキ山 伏	役 別	装 束	附	季	所
面小鏡見 法被 半切 唐冠 扇 赤頭 鏡持 金緞鉢巻 着附厚板	面朝倉突尉ミモ 尉扇 尉髮 杖突ク 着附無地尉火斗目 茶水衣	兜巾 藤懸 小刀 男扇 着附厚板 水衣 白大口 腰帶 薊高珠数持				正	大和 奈良 春日 野 雪消
(能切) 目番五	曲柄 替古唄	月				五	級

野守

禪鳳元安作

^{知祥山伏} 若^{サテ} 山^{ヤマ} 伏^{フシ}
^{拍子合} 若^{ツキ} 山^{ヤマ} 伏^{フシ}
 若^{ツキ} 山^{ヤマ} 伏^{フシ} 露^{ツキ} け^ケ き^キ 狭^ヒ に^ニ や^ヤ 若^{ツキ} に^ニ 露^{ツキ} け^ケ き^キ
 狭^ヒ に^ニ や^ヤ 夜^ヨ の^ノ 玉^{タマ} を^ヲ 含^ク む^ム ら^ラ ん^ン 若^{ツキ} に^ニ 露^{ツキ} け^ケ き^キ
 出^デ 羽^ハ の^ノ 若^{ツキ} 黒^ク 山^{ヤマ} よ^ヨ り^リ 出^デ て^テ た^タ る^ル 山^{ヤマ} 伏^{フシ}
 若^{ツキ} に^ニ 露^{ツキ} け^ケ き^キ 大^{ダイ} 峯^{ホウ} 若^{ツキ} 葛^カ 城^{シロ} に^ニ 来^キ ら^ラ ず^ズ 若^{ツキ}
 若^{ツキ} に^ニ 露^{ツキ} け^ケ き^キ 夜^ヨ の^ノ 度^{タク} 和^ワ 列^{レツ} へ^ヘ 急^ク ぎ^ギ 若^{ツキ} 作^{サク}
 道^{ミチ} 行^{ユキ} 上^{ウヘ} 若^{ツキ} の^ノ 宿^{ヤク} 鹿^カ 島^{シマ} 野^ノ の^ノ 草^{クサ} 花^{ハナ} 宿^{ヤク}
 若^{ツキ} の^ノ 宿^{ヤク} 鹿^カ 島^{シマ} 野^ノ の^ノ 草^{クサ} 花^{ハナ} 宿^{ヤク}

野守

下

鹿島野の草枕ふに仰し寔に起き
別れ床の眠も今更な被寝の月
の歌も西へ行方か是曳の犬和の
國に急きたけり大和の國に急きた
けり 内丸カハ 急ぎの佐強に新打春日の里
に急きてい人と待ちてこのあたり
のふ所も尋ねむやとぬら

シテ射上サツリニ
一声
掛合ハス

春日野の飛火の誓守出で
見れば今幾強ぞ若葉摘む サシ 柳ハナニ
これに出でたる老人の此の春日
路に年を経て山にも通ひ里に
も行く野守の翁にてありあ
りかたや慈悲萬行の春の色三
笠の山に長閑にて立重唯識の

秋の風春日の里に音信て。眞
 に誓も直なるや。神のまにまに
 行きかたり。運ぶ業も積る老の
 榮ゆく清教作ぐあり。唐去まで
 も聞えあるこの宮寺の名ぞ高き
 昔仲磨か。昔仲磨か。我が日の本
 を思ひやり。天の原よりさけるる

○小菘

上寺 明カニ

昔

昔

昔

昔

と詠めける。二笠の山陰の月かも
 くれハ明刃の月あれや。さるる良
 の都の春は長閑けき。氣色ハハ
 春日長閑けき。氣色ハハ。いかに
 くれある老人に。事ぬべき。事のふ
 行事と御事ね作ぞ。御方の此の
 可の人が。さるる。この春日

シテ 明カニ

ロキ サラテ

シテ サラリ

野の野守にても 野守にても
まさるこれに由ありげなる水の依
は名のある水にてもか されそ
野守の鏡とやす水にても入
あら面白や野守の鏡と何行と申
したる事にてふぞ されら如ま
の野守影と映とやすはより。

野守の鏡と申しふ又真の野守の
鏡との昔鬼神の持ちたる鏡とこ
そありみびて作へ 行とて鬼神
の持ちたる鏡とば野守の鏡と
は申しふぞ 昔この野に位み
ける鬼のありし 晝の人となり
てこの野と守り 夜の鬼となつて

了れなる塚に住みけりありきれば
 野と守りける鬼の持ちし鏡あれ
 はらて野守の鏡と申し候
 謂と聞けむ面白やさてかろの野
 に住みける鬼の持ちしと申さるの
 鏡ももりて又の野守の影と映せ
 の水とも野守の鏡と云ふ事

早カル上カッテ
 神子合六

両説いづれも謂あり野守の
 名の昔も今も変らざりけり
 由覚えや立ち寄れければも野
 守の水鏡げにも野守の水鏡
 と映していそあほ老の彼の真鏡
 水のはればみる昔の
 われぞ恋しきげみわきたひても

早カル上カッテ

早カル上カッテ

早カル上カッテ

早カル上カッテ

かひあらばこそ古の狩守の鏡
得し事も年古まきの世の例わか
古まきの世の例わか。いかに申すべま
事のいさ著鷹の狩守の鏡と詠ま
れたるもこの水につまての事に
てゆか。いさこの水につまての
得てくる。倍つて聞かせ申しゆべ

さらば御物語作へ 昔此の野に
所狩のありしに御鷹と失ひ給
ひ。彼方此方と御尋ねありしに。
一人の野守ありあひ。翁の御鷹の
行方や知りてありける。いと聞かせ
給へども。彼の義やすやう。さん作
とれある。水の底にこそ御鷹の足

○獨吟

と申せらばけりて御鷹の氷の底に
 あるべきとぞも狩人ぞつと雲のされ
 へげにも正しく水底に
 よしとて白斑の鷹あるよしと
 見ええて白斑の鷹すくよく見れば
 木の下の水に映れる影ありけるぞ
 や鷹の木の居にありけるぞとて
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ

箸鷹の影さしてこそ箸鷹の野守の
 鏡得て一かま思ひ思ひよそ
 らんんと詠みよもこの鷹と映す
 故なり。眞に畏ま時付きて
 も敏まき春日野の飛火の野守出
 てあひて教慮にかるかなから
 老の思ひ出の母信と申せばすむ
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ
梅子合 月サフリ

源ヒコトかお申シマフせばすむ源ヒコトかなナラ
 げロギ上にや昔コトの物モノ持モト聞クえたつツけても
 眞マコトの野守ノノリの鏡カガミをシテ終ハシへ思シひよ
 らすの御事ミコトノコトやそれシテ鬼オニ狒ヒの鏡カガミ
 あれイサをいかにイてテすスべマ甲カ地上チジョウをシて
 鏡カガミのありアリ可コト聞クかまほホきキんンでデ喜ヨシ日ヒ
 野ノの野守ノノリとシテらラもモわれレわれレが

鏡カガミかなナどトかカ持シテたタざザらラんンとト疑ウタガハをシ
 終ハシみミかカやヤ鬼オニの持モトちチたタるル鏡カガミあアらラばバ
 見ミてテのノ恐オソれレやヤ絵エんン眞マコトの鏡カガミとト
 見ミんン事コトのノあアまマまマどトろロのノ塵チリをシんン
 水ミヅ鏡カガミとトいイはハ終ハシへヘとトてテ塚ツツミのノ内ウチにニ入イり
 けケりリ塚ツツミのノ内ウチにニ入イりリにニけケるル中ナカ入イ間マ
 〇切キはハ難ナチチヨククのノ〇〇かカらラるル奇キ持チにニあアまマ事コトもモたタれレ行ユク徳トク

野守

の故ありと。思ふ心と便にて鬼神の
 位みける塚の前にて。胆を碎ま
 折けり。われ年竹の功と積める。
 その法力の真あらば鬼神の眼
 鏡現して。われに奇特と見せ
 給へや。南無歸依佛
 有難や。天地と動かし鬼神と感せ

後三鬼神上

出端

一佛成
 道の法味より引かれて。鬼神は横
 道墨女く。野守の鏡に現れたり
 恐ろしや。打火輝く鏡の面に映
 る鬼神の眼の光。面と向くべき
 やうそなま。恐れ給う。帰らんと
 鬼神の塚に入らんとす。暫く

口方上

地本

シテ

鬼神侍ち終へ夜のみまだ深き後
 夜の鐘シテ手接ク時はさら伏す野舟の鏡
 法味ワキヤラにうづり終へてシテ手接ク重ねて
 珠数とワキヤラ押しもんでワキヤラ大嶺の
 雲と凌ぎサラリ大嶺の雲と凌ぎサラリ年
 行の功と積むとサラリ千余箇日屢
 命と惜まサラリす採果汲水にひま

○仕舞

と得ず一矜迦羅シテ上チ接ク二制多伽シテ上チ接ク三に
 俱利伽羅シテ上チ接ク七シテ上チ接ク大八シテ上チ接ク人シテ上チ接ク金剛シテ上チ接ク童子シテ上チ接ク
 東方シテ上チ接ク西方シテ上チ接ク降シテ上チ接ク三世シテ上チ接ク王シテ上チ接クもこの
 鏡シテ上チ接クに映りシテ上チ接ク又シテ上チ接クの南シテ上チ接ク西北シテ上チ接ク方シテ上チ接クと映せば
 八面玲瓏シテ上チ接クと映シテ上チ接クかにシテ上チ接ク天シテ上チ接クと映せば
 非想非非シテ上チ接ク想シテ上チ接ク天シテ上チ接クまでシテ上チ接ク隈シテ上チ接クあシテ上チ接クくシテ上チ接ク
 大地シテ上チ接クとみ見ればシテ上チ接ク又シテ上チ接ク大地シテ上チ接クとみ見ればシテ上チ接ク

地獄道 刻まづの地獄の者候と
現す一面八丈の淨波瑠の鏡と
あつて罪の輕重罪人の呵責
おつや鉄杖の教給悉く今えたり
さてこそ鬼衆に横道と正す明
鏡の寶あれすのや地獄に席るそ
とて大地とかりを踏みあらう。

大地とかりを踏み破つて
の底にぞ入りける。

大正拾年七月二十拾日印刷
同 年七月二十拾五日發行

大正拾年七月二十拾日印刷
同 年七月二十拾五日發行

著者權所
顧 慙 不 許

訂正著作 廿四世
觀世元滋

發行兼 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江 川 堂

東京市神田區錦町一丁目拾番地

東京市四谷區傳馬町貳丁目



終